

DYNACOLOR社 IP関連製品紹介



DYNACOLOR JAPAN 副社長
松尾憲昭氏

DYNACOLOR JAPAN

DYNACOLOR JAPAN副社長の松尾憲昭氏は、日本国内メーカーでディスプレイモニタの開発設計に約30年携わってきた実績を持つ。2006年6月にDYNACOLOR JAPANの設立とともに入社し、以来日本市場での同社製品の拡販に取り組んでいる。監視市場は初めての経験であるが、それまでのモニタ分野での経験を活かし、台湾流の効率的な設計思想と日本流の品質重視の設計思想との融合を図ることで市場拡大を狙っている。

DYNACOLORは1991年に台北市で設立した会社である。同社はAOI(光学検査装置)の開発・設計・製造会社としてスタートし、その卓越した画像処理を活用して、CCTVの世界に進出した。独自のマーケティング手法で市場の要求する製品を先行開発し、適時に新製品を市場投入することで急速に市場シェアを拡大している。2006年6月に日本法人DYNACOLOR JAPANを設立し、日本市場での販促活動、顧客からの要望の対応、アフターサービスの3つを主要業務として活動している。

DYNACOLORのセッションでは、DYNACOLOR JAPAN副社長の松尾憲昭氏が登壇した。同社はもともと、台北に本社を置く光学検査装置(AOI)メーカーであり、CRTの検査装置を開発している。AOIで培ったイメージプロセッシング技術をベースに、現在では監視カメラやDVRといったCCTV関連製品も開発している。製品企画から開発設計、生産までを一貫して自社工場および自社スタッフで行っている特徴があり、日本以外には、米国や中国にも拠点を置いている。

松尾氏は簡単な会社概要の説明の後、同社の次世代製品であるIPカメラについて、講演を行った。「高画質で高感度、オートアイリス、オートICR(近赤外感度切り替え)と、D1、HD、フルHD画質でリアルタイム(30fps)は、今後必要な要素だ。そのためには、H.264が不可欠」と語り、これらの機能をH.264対応のカメラに搭載していくとコメントした。また、製品ロードマップを示し、ボックスカメラからバンドルプルーフ(防破壊)カメラまで、H.264対応で、D1から1080pまでの解像度に対応したカメラを2009年に開発すると発表した。それぞれの製品のリリース時期については、「市場動向を見ながら提供していきたい」と語った。

続いて、松尾氏は同社のDVRラインアップについて紹介した。MPEG-4やMJPEGに対応し、D1で120fpsまで対応する従来のDG200シリーズに加え、今後はH.264対応で、D1、480fps(16ch)にまで対応するDG600シリーズを展開するとのこと。他社製の各種IPカメラにも対応する。リアパネルには、16chのオーディオ入出力と、HDMI出力、NASおよびギガビットLAN端子を備える。

なお同社は、各ハードウェアの開発段階でAPIを提供し、ソフトウェアのインテグレーションを同時に行えるようにしている。「これにより導入時期を早められる」と松尾氏はコメント。また、カメラ製品については、セキュリティ以外の用途での活用も検討しており、5メガや8メガピクセルのカメラをベースに、ITS(高度道路交通システム)分野への提案も行っていくという。